

---

# Unlimited Cross World

那岐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Unlimited Cross World

### 【Nコード】

N1379X

### 【作者名】

那岐

### 【あらすじ】

VRMMO《Unlimited Cross World》それは武器や防具、種族や職業、スキルが無数に存在し、そのありえないほどの自由度から世界中の人が遊ぶくらい人気なゲームだ。その反面レベル上げや、死んだときのペナルティが鬼畜でレベルカンスト者が出ないだろうと思われていた。

しかし5年の時を経て一人のカンスト者が現れる。八重草 限莉。キャラ名はカギリ。職業魔法使い複合職：バトルメイジ。

そんな彼女に神様の褒美などという素っ頓狂なログが流れる。

何気なく願ってしまった《Unlimited Cross World》みたいな世界に転生したいという言葉。

どうやらホントにそれは神様からの褒美だったようで、気づいたら《Unlimited Cross World》の世界に生まれていた。しかも最初からレベル1500というチート付きで……。急遽第二の人生をチート付きで過ごすことになる主人公。こんな世界で穏やかに暮らせるはずもなく、事件が次から次へと舞い込んでくる。新しい世界で彼女はどう生きていくのか!? ドタバタ転生ファンタジーここに開幕。

なんて偉そう言ってますが処女作です。文章慣れと暇つぶしに書き始めようと思いたって書いている作品です。

稚拙なところや誤字脱字など、至らないところは多くあると思います。そんな文章でも良いという方のみお読みいただけると幸いです。

## 十王都十

王都は、トリスティア、スフィア、ヴェネア、アクア、ストレイアの5つあり、カギリが最初にいたのはトリスティアで、ゲーム内で始まりの街とされている場所。他にも村などは多数あり中には王都並みに大きい街もある。基本的に王都にはギルドを作る場所があり、転職なども行える。

## 十冒険者ギルド十

各地に存在する冒険者のためのギルド。

ランクに合わせて依頼を扱っており、素材の換金なども行っている。ランクは E から SS まで存在しており、個人では自分より2ランク上、PT では一番上のランクの者の1つ上のランクの依頼まで受けられる。

ランクは依頼を受ければポイント制で上がっていき、依頼ランクによりそのポイントが決まっている。

十種族十

Unlimited Cross Worldでは大きく分けて五種、全七種類の種族がある

ヒューマン

全体的に平均的で、ダブルスジョブが可能。  
上位複合職に通じており可能性は無限大。

エルフ系列

エルフ族

魔力は他を圧倒するものがあり、聖属性魔法に精通している。  
正確性が高く、弓などの武器が得意。  
上位種が存在する唯一の種族。  
上位種、ハイエルフはほとんど存在せず、聖属性上位魔法を使える  
数少ない存在。

ダークエルフ族

エルフ族から派生した黒魔法が得意なエルフ。  
高い魔力と黒魔法により攻撃系魔法使いでは最強に近い。

ダークハイエルフは今では存在しないとされているが、存在していた時は敵う者は少なかったという。

#### 獣人族

獣人族にはおおまかには二種類存在しており、猫族と狼族の二つである。

#### 猫族

回避率・命中率は他の種族を大きく上回っており、近接戦闘に向いている。

そのため盗賊系統の職業一択である。他を凌駕するスピードは戦場を混乱に陥れる。

#### 狼族

攻撃力・筋力が非常に高く、斧や鈍器などの武器が向いている。戦士系統の職業一択だが、その分攻撃力は他の種族を圧倒する。他種との関わりを拒絶するものが多く、単独戦闘に特化したスキルが使える。

#### 神族

神に準ずる種族で魔力が高く、聖属性魔法・回復系魔法が得意。  
最上位聖魔法や強化魔法を多く使えるため、補助として重宝される  
存在。

基本的に数は少ない。

ダブルスジョブが可能だが上位複合職には通じていない。

## 魔人族

闇の魔法に精通しており、多種に嫌われがちだが、  
悪用は種内で禁じられており、実際は嫌われるような存在ではない。  
力が強く、戦士系職業にも向いていると言われているが基本的に万  
能である。

ダブルスジョブが可能だが上位複合職には通じていない。

## 十職業十

職業は戦士系職業と魔法使い系職業の大きく分けて二つに分かれ、  
そこから細かく分類される。

## 戦士系職業

物理攻撃に重点を置いた職業で大きく2つ、全部で6種類の職業が  
ある。

全体的に前線に向いており、魔法使いに比べて体力が高く、MPは低い。

## 戦士

多様な武器を使って主に前線で活躍する職業で、大きく3つの職に分かれる。

MPが無いに等しく、強化などの魔法が少し使える程度で上位魔法が使えない。

その変わり体力を削ったの攻撃などもあり、物理攻撃力・防御力が高いのが特徴。

単体攻撃を得意とする職業で、盾を使用でき、片手剣や双剣などが主な武器のナイト。

範囲攻撃を得意とする職業で、両手斧や両手鈍器、槍などを使うウォーリアー。

防御力は戦士としては低いが、戦士系唯一の遠距離型で多様なスキルを持つ、クロスボウや弓を使うボウマスター。

## 盗賊

素早さに重点をおいた職業で3つの種類に分かれる。

戦士系にしてはMP・体力共に平均的にあるが、防御力が低い。

諜報活動や飛び道具などを得意とし、回避率は全職一を誇るシャド  
ー。

暗殺や短剣を使った技を得意とし、スピードにおいては全職一を誇るアサシン。

防御力は全職中最弱だが、銃を使うことによりそれを補い、前線、後衛共に役立つ万能職ガンマスター。

### 魔法使い系職業

魔法に重点を置いた職業大きくで3つ、全部で4つの職業に分かれる。

全体的な特徴としてMPが高く、体力が低い。

魔法防御力が高いが、物理防御力が低く、主に後衛での戦闘を想定された職。

### 攻撃系魔法使い

火・風・雷・氷の四属性の攻撃魔法を得意とする職業。

職業は2つあり、それぞれ火・風、雷・氷に分けられている。MPを大量に消費するものが多いため、MP枯渇もしばしば。

雷・氷系魔法を習得することができるウィザード（雷・氷）

火・風系魔法を習得することができるウィザード（火・風）

### 回復系魔法使い

聖属性魔法による回復魔法を得意とする職業で種類としてはヒーラーのみ。

一部上位魔法で聖属性攻撃魔法を習得可能だが、基本的に攻撃魔法はなく、回復専門である。

#### 補助系魔法使い

各属性の強化魔法を得意とする職業。これも分類としてはバッファーのみで、攻撃魔法もアークメイジ程ではないが多様に覚えられる。非常にバランスの良い魔法使いとされている。

#### †ダブルスジョブ†

ダブルスジョブは2つの職を同時に修業することができることで、ヒューマン・神族・魔人族の600LV以上から可能。マスターレベルは900。

#### †上位複合職†

上位複合職は900LVまでダブルスジョブを極めたヒューマンのみ修業可能な職。

ダブルスジョブで学んだ内容によりその職は決まり、中にはユニーク職も存在する。

バッファークナイト（攻撃特化のステータス）またはウォーリアー：ナイトウィザード

これぞ魔法剣士の代表とプレイヤーからは人気だった職。転生後の世界もそれは同じらしく900Lv以上はナイトウィザードが多い。

強化魔法と戦士特有の攻撃力により単発火力が高い。両手武器が主な武器

バッファークナイト（防御特化のステータス）：パラディン

盾を使うことを前提とし、

戦士独自の体力の多さと補助魔法により極限まで防御力に特化した戦士職。

そのため片手武器を主な武器とする。

ガンマスター×ナイト：デュアルマスター

双剣・双銃を使うことに長けた職。

手数が増えた違いで最もスピード感ある職。

しかし成長速度がガンマスター・ナイト共に遅いため、

挫折者が多発しその存在に到達したものは居ないと噂されている。

ウィザード（雷・氷）×ウィザード（火・風）：黒魔術師

ほとんど全ての攻撃魔法に精通し、魔法使い職で最強に近い火力を持っている。

聖属性魔法・回復魔法が一切使えないため、人気の低い上位複合職。

ウィザード（雷・氷）×ウィザード（火・風）：バトルメイジ

二つの魔法使いをマスターしていて尚且つ近接スキルを10個以上持っていることが前提条件で、

最も早くこの条件に到達したもののみ修業可能なユニーク職。

900Lvまでに魔法使いで習得可能な近接スキルはクエストクリアのものも合わせて10個だった。

近接型の魔法使いで、闇魔法が主。

強化・HPドレイン・範囲魔法なども多様に習得でき、火力も化け物級。

プレイヤーからはあれこそチート職と言われていた。

ガンマスター×ヒーラー：ガンヒーラー

銃の弾丸を魔法化しそれに回復効果を付加することを前提に作られた職。

魔弾は通常攻撃としても使うことができ、非常に機動力のあるヒーラー。

ユキのみが就業している職で、そういう意味でのユニーク職

キャラクター紹介 2011 11月09日 更新 少しネタバレが……

作者の都合上適当に追加されていきます

## キャラクター紹介

2011

11月09日

更新

少しネタバレが……

前世界

八重草 限莉 (やえぐさ かぎり)

年齢：18歳 大学生

体が弱く、入退院を繰り返していた。

そのため異分子としていじめられることがしばしばで孤立していた。

華雪とは病院で知り合い、今では親友。

華雪に勧められたのがきっかけで Unlimited Cross World を始める。

使用していたキャラ

キャラ名：カギリ

種族：ヒューマン 職業：バトルメイジ

Lv：1500

神咲 華雪 (かんだき かゆき)

年齢：19歳 大学生

部活での怪我で病院に運ばれたときに限莉と出会う。

以後何かと限莉の世話を焼くようになり、今では親友といっても差し支えない存在

限莉に Unlimited Cross World を勧めた  
張本人

使用していたキャラ

キャラ名：ユキ

種族：猫族

職業：アサシンとウォーリアーのダブルスジョブ

LV・684

Unlimited Cross World (現世界)

初期(カギリ5〜15歳)

カギリ・エスフォード

限莉の転生体。

3歳の状態で転生し、町の門近くに倒れているのをアイン・エスフォードに拾われ、

エスフォードの姓を貰った。

魔法・体術共に天才的で5歳で冒険者になることとなる。

種族：ヒューマン 職業：バトルメイジとナイトのトリプルスジョブ  
Lv・1658（15歳時）

咲

カギリの使い魔で普段は猫の姿をしている。  
こちらの世界では会話も可能で、色々なものに変身できる。  
レベルはカギリと同レベルである。

アイン・エスフォード

門近くに倒れていた限莉を拾い、以後我が子のように育てる。  
元Sクラス冒険者で、引退後はその腕を見込まれ、騎士団補佐の地位に落ち着いた。  
嫁はクレハ・エスフォード。

種族：ヒューマン 職業：ナイトウィザード  
Lv・958

クレハ・エスフォード

アインの嫁。エルフ族で元Sクラス冒険者。  
アインとは討伐クエストで知り合い、以後PTを組んで今に至る。

種族：エルフ

職業：ヒーラー

LV：1058

ユキ・エルレイン・アリア

5歳の時に会った華雪によく似た子供。

知識の吸収能力が常人の倍以上で、周りからは天才と呼ばれている。

聖属性魔術に関してもずば抜けて扱いが上手い。

大人びた思考をもっており、喋るときはほとんど敬語。

カギリとは2歳だけしか変わらない。

8歳くらい上にみられることもしばしばである。

種族：ヒューマン

職業：ヒーラー

LV：82（17歳時）

中期（カギリ15〜25歳）

カギリ・エスフォード

白銀の黒魔術師として名を轟かせた制裁者。

現在は各国を点々としながら冒険者としてのクエストをやっている。

特殊複合職と現実の影響力により、自らの能力を変質・改変したり、

相手の能力を吸収・無効化できるようになった。

ただ、使いすぎて魔力が枯渇すると副作用により幼女の姿になり、

身体能力が弱体化する。

種族：純潔の吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>

職業：?????

LV・1854（25歳時）

ユキ・エルレイン・アリア

現在は何も言わず消えたカギリを少量の情報をもとに追ひ、各国を回っている。

種族：ヒューマン

職業：ガンヒーラー

LV・988（27歳時）

## 第一話：転生

ガツシャーン！！

そんな音とともに弾けるポリゴン。

それとともにレベルアップを告げるファンファーレが鳴り響く。

VRMMO 《Unlimited Cross World》  
最初のカンストレベル者の誕生だった。

ステータスウィンドを開くと表示された数値、1500Lv。

ここまで来るのに5年、やっとたどり着いた最強の称号。

しかし、その数値を見た少女は少しも嬉しそうな顔をせず吐き捨てた。

「あゝああ、終わっちゃった。これでこのゲームも終わりかあ」

彼女にとってゲーム最強など欲しくもなかったのだ。

暇つぶし、所詮遊びだし、死んでも多少のペナルティがあるのみ。

現実に何の影響もないのだ。

「これが現実だったら多少喜んだのだろうけど……」

そんな独り言をつぶやく。

彼女は冷めていた。現実には、ゲームに、この世界に。

八重草やえくさ 限莉かぎり 18歳 大学生。

現実には酷いものだった。

何をするにも学力主義、競争の世の中。

元々あまり体が強い方では無かったことから落ちこぼれとしてよくいじめられていた。

そんな時唯一の友人からVRMMOというものを教えてもらった。

最初はVRMMOと呼ばれるものの全てが新鮮で、何もかもが楽しかった。

でも……。

ゲーム内の詐欺、無差別PK……etc

言い出したらきりが無い。所詮この世界も強いものが頂点に立つ。

そして、ゲームを作ったのもプレイするのも所詮”人”なのだと思つたその時から、

全ての感情が冷めた。

ゲームはただの作業になっていった。

そして5年の月日を経ていつの間にかゲーム内最強の存在となっていた

何でここまでやり続けたかって？

それは友人からの約束があったからだ。

一緒に1500Lv達成しようね、という一つの約束。

ボスつばいのも一通り倒したし、レベルも限界突破して約束の1500Lv。

晴れて私も約束を守れたわけだ。

「ホント、現実もこんな簡単なら良かったんだけど……。ねえ？  
咲」

そう言って猫型をした使い魔、咲に話しかける。

すると、にゃあと鳴いて咲は足元にすり寄ってきた。

あなたは気楽でいいわね。

さて、そろそろ戻ろうかと思って立ち上がると同時に

ポーン！と音を立てて目の前にログが流れた。

不覚にも少し驚いてしまった。

後ずさったことを少し恥じながら目の前のログを見る。

「レベルMAXになったあなたに神様からのプレゼント　何か願い事をどうぞ」

なるほどイベントね、納得。でも神様ってまた面白い設定にしたわね；

願い……かあ……。

ゲームの中なのだから最強装備を授けてくれるとか、

そんな些細な願いしか聞いてくれないのだろう。

でも武器などには興味はなかった。

もうこのゲームをやることは無いからだ。

どうしようか？と色々と考えていると……。

ふと、私は試しなくなった。このシステムがどこまで願いを叶えてくれるのか。

気づいたら眩いていた、この先の運命を変えるであろう一言を。

「こんな世界に転生したいなんて願いでも叶えてくれるのかしら？」

その場に沈黙が訪れる

まあそうだろうなあとは思っていた。

所詮ゲーム、こんな願い無理なのだ。

そう思っただけ一応武器でも貰っておこうかと口を開きかけた瞬間それは起こった。

爆音とともに周囲は光に包まれたのだ。

「何こ……これ……………。」

その光は疑問を最後まで言わせる前に彼女の意識も刈り取った。

同時に白一面だった世界に膨大な量のログが流れ始める。

「願いを確認。……………受理。」

これより設定を作成。

この世界をトレース。

.....。

.....完了。

現在の世界のバックアップ。

.....。

.....完了。

対象者の器を初期化、および3歳に設定。.....完了。

種族、職、スキルなどを現在の物で固定、  
及び能力値を《Unlimited Cross World》  
内の1500Lvで固定。.....完了。

人物を反映。.....誤差修正。.....完了。

レベル制限解除。.....完了。

現在の世界との互換性の影響により一部データの書き換えを実行。  
.....完了。

許容範囲内の誤差によりアカシックレコードの内の情報の使用は  
不要と判断。

版世界データを作成、反映できるかの最終チェック開始。

.....。

.....完了。異常なし。

このデータをマスター版とし、現在の世界に反映します。

反映開始。.....現在の世界を削除。.....マスターデータを反映、  
定着化を開始。

.....。

.....完了。

対象者に該当データを反映。.....記憶保持により多少の誤差、  
対象者の行動に誤差が発生。.....修正。

.....すべての工程を完了。

これより世界名を変更。.....世界名《Unlimited Cr  
oss World》.....」

全てのログが流れ終わる

世界は変わり、彼女は.....18歳にして新しい世界へ転生した。

第二話：エスフォードの姓 (修正版) (前書き)

意見の元修正してみました> <

感想、意見など悪い点、良い点どしどし募集です。

まだまだ未熟な身ですので寛大な心と手加減突っ込みでお願いします  
すw

違うか……w w w

## 第二話：エスフォードの姓

（修正版）

「ん……んう………」

目覚めは最悪だった。

頭はガンガンするし体が重かったからだ。

とうっか………「じ」ど「じ」？

現代に似つかわしくない木造の部屋、おまけに明かりはランプである。

え？ランプ？

見覚えのある無機質なランプに引っ掛かりを覚える。

「じ」……VRMMO内？

そうとると妥当そうだけど何か引っかかる。

まあいいか。

そう思って寝てしまったことを悔やみながらメニューを開いて気づく。

ログアウトボタンハドコデスカ？

あわててステータスを覗く。

するとそこにあつた表示は

人物名：カギリ

LV：1500

職業：バトルメイジ

年齢：3歳

……………え？

よくよく見てみたら腕も短いし、背も低い。

どう考えても3歳児の子供である。

そして少しずつ思い出してきた。

そう、先日転生したいと願ったことを。

ホントに転生しちゃったの？これ？

でもステータスそのまんまだしメニュー画面も開ける。

どうゆうこと？でもこれはこれで良いのかな？

何か面白そうだし

雪とかは転生だし、いないか…。

少し残念。

3歳ってのも微妙よね。

と、そんなことを色々考えていると部屋の扉が静かに開いた。

「おや、目が覚めたんですか？ 良かった。門の近くで倒れていたところを見つけた時はどうしようかと思いました。」

この家の主？ らしい人が入ってきて起きている私を見るとそう言った。

言葉はちゃんと通じるらしいことに内心安堵する。

へ、別に心配してたわけじゃないんだからね！？

そして拾ってくれたらしい男性を見つめる。

歳は20代後半といったところだろうか。

剣を腰に下げていることから剣士の類で、さらに現代ではないことを再認識させられる。

願ったのは私なんだけど、実際になるとはこれいかに……。

しかしなかなかかつこいいわね、服装とか。

私もああいった服着てみようかしら。

そんな風に適当に考え事していると何を思ったのか彼は、

「えと！ 僕は決して怪しいものじゃなく……倒れている君が心配で連れてきただけというか……だからその誘拐とかじゃなくて……  
……っというか僕の言葉分かるよね？」

なんて慌てて言い出した。

その慌てた様子がおかしくて、私はつい声を出して笑ってしまう。

「ごめんなさい……ついおかしくって。大丈夫、倒れている私を助けてくれたんですね？」

ま、まさかそんなこと思ってたなんて……。ダメ……。我慢できない  
……ぷくくっ……！

そう言いながら失礼にも私が笑い続けていると、しばらく唾然と  
していた彼が、我に返ってそうそう、と頷いた。

素直な人ね。

それからしばらく無言でお茶を飲んでいると唐突に彼が

「それにしても、随分と大人びた話し方をするんだね、貴族のご令  
嬢とかなのかな？」

とか言い出した。

そうかな？ 私としては普通に年相応の……。年相応……？

って、あ！？

今私3歳じゃん!?

現実を再々認識。

うーん、これからは気を付けないと……。

でも私にとってこれが普通なのよね。

「えと……まあ、そんな感じ?」

とりあえず曖昧な返事を返しておく。

内心冷や汗が止まらないのである。

「そっか……じゃあ送り届けないとね、君、名前は? いやこちらから名乗らないとね、僕はアイン・エスフォード 一応今は騎士団補佐をやっている。……って言うてもまだ分からないか。」

藪蛇だったか……。

お人好し過ぎるわよ! もう!

今さっきの令嬢宣言を早々に撤回したくなってきた。

名前はカギリでいいのだろう。

でも、出自に関して私は白紙に近い。こんな状況だ、親もきつとしないだろう。

故に名前だけしか言えないのだが……。

「ん？　どうかした？」

アインは訝しげに首をかしげている。

考えても良い案は浮かばなかった。

最終的に、私はどうとでもなれと思いい口を開いた。

「私の名前はカギリ。姓は無し。親もたぶんいない……。」

それを聞いたアインは黙ってしまった。

当然の反応だろう。

拾ってみたら、ただの身元不明者だったのだから。

やっぱり選択間違っただかな。

親がいなくて姓も無いなんて普通に考えればおかしな話だ。

私でも正気を疑うだろう。

しかし、彼、アインは違った。

しばらく私を見つめてきて嘘はないと判断したのか、アインは唐突に言い出した。

「じゃあ、僕の家族になるかい？」と。

ホントお人好しよね！

これはその後聞くことになるのだが、彼には妻がいて、その妻が不妊症で子供が欲しかったらしい。

「そんなことで見ず知らずの私を家族になんて頭おかしいんじゃないの？」という正直（とっても失礼）な感想を述べてみると、

そんなことを問いかけてる時点で悪い子じゃなさそうだし、それに嘘をついてるわけでもなさそうだしね。

と、こともなげに返された。

そりゃあ……嘘はついてないけどさ……。

そんなこんなで私、八重草 限莉は 今日をもってカギリ・エスフ  
オードになることとなったのである。

### 第三話：母VS娘（修正版）

この世界について色々探って分かったことがある。

その一つとして、この世界、誰でもステータス画面が使えるのだ。  
もちろんアイテムボックスも。

さらにレベル制。

平均的には25歳でLv500越えは結構異常で、

45歳くらいでLv1000。

そして1500以上の存在はこれまで存在してなかったらしい。

つまり、3歳Lv1500なんてのはチートもいいところである。

そして……。

カギリ・エスフォード：5歳

エスフォードの姓を貰ってから二年……。

それは凄まじいスピードで過ぎた。

アインの妻、クレハにも事情を説明し、

反対されるかと思っただらあっさり受け入れてくれた。

そして家族になってから二人の親バカっぷりが凄かった。

色々調べるために、初級魔法を使っていたらその場面をアインが目撃。

うちの子は天才だ！と宴会を始め、

服が少ないことで困っているとおよそ40着もの服を買ってきた。

もちろんその場で着せ替え人形のごとく遊ばれたのは言うまでもない。

買い物に一人で出かけたときは変装までしてついてきた。もちろんバレバレである。

その他過保護すぎる場面が山のようにあった。そりゃ溜め息も止まりません、ええ。

そんなこともあったが、なんだかんだ言いつつ基本的に良い人なので、怒るに怒れなかった。

しかし今、絶賛親と喧嘩中なのである。

過保護な方面では五十億万歩くらい譲って良いとして、

原因は冒険者になりたいと私が言ったことからだ。

一応冒険者になるには5歳以上の制限がある。

しかしこれは一応なれますよ、というだけで実際は最低でも15歳くらいからなるのが普通だ。

カギリの場合事情が事情である。

正直な話ここでガチバトルを始めてもアインやクレハではカギリに傷一つ付けられないだろう。

ぶっちゃけ強すぎるのだ。

冒険者の証とか持ったままなんじゃないの？

とか思うかもしれないが、（カギリもそう思ってた）

転生の影響か冒険者の証は無く、お金も初期化されていた。

かなり致命的である……。

しかし何もこんな早く取る必要もないんじゃないって話に行きつくんだけど……。

それはほら……やること？ ができちゃったから。

それは1年前……何気なく埋まってるはずの職業欄を見た時である。

「職業欄が空いてる……?」

そう、二つの魔法使い職で埋まってるはずの職業欄が空いているのだ。

本来であれば

ウィザード（雷・氷）

バトルメイジ

ウィザード（火・風）

と表示されるはずが、

バトルメイジ

というふうになっている。

もしかして、トリプルスジョブ可能……？

事実ウィザードのスキルは全て残っていたのだ。

そんなこともあって試そうと思ったのだけれど問題が浮上してきた。

冒険者の証は身分証明書にもなり、職業に就くのに必要不可欠。

それが無いのだ。

なので冒険者になりたいと思ったのだがなんといても未成年。

保護者の許可が必要なのである。

そして現在。

「ねえお母様、お父様、お願いよ」

そういつて上目遣い全開でお願いする。

ちなみにこの呼び方は二人からそう呼んでほしいとお願いされて、

それ以来そう呼んでいる。

しかし、

「うつ……そんな目で見てもダメなものはダメだ！ お前を危険な目に合わせたくないんだ。分かってくれ」

の一点張りである。

うーん……。

「なら、危険じゃなかったら良いの？」

その言葉にどういう意味が分からないといった表情をしながら、まあその証明ができるなら……、と頷いた。

「うん、ならお母様とお父様 対 私で模擬戦して、私が勝ったらおkっていいのは？」

その発言は予想外だったのだろう、二人驚いた顔をしていたが、

それが呆れにかわり、ため息をつきながらパパが口を開く。

「あのなあ、カギリ。お前が強いのは良く知っている。しかし、お父さんとお母さんは元冒険者で、Sクラスだったんだぞ?」

「それは勝てないと言いたいわけ?」

若干不満そうに返す。

それにお父様は、多少気まずそうに

「まあ……うむ、そうだ」

と言った。

「言ったわね? つまり倒せれば昔冒険者だったお父様とお母様は私に文句言えないわよね? それともこんな子供相手じゃ不満?」

自分で言っても挑発的でお父様を怒らせたかな? と思っていると、意外にも怒ったのはお母様だった。

「そう……少し甘やかしすぎたみたいね………良いでしょう私が相手してあげます。外に出なさいカギリ、世界の厳しさを教えてあげる」

え……。

「ちょっとクレハ！？性格変わってるよ！？ダメだって！」

必死で止めようとするアインだったが怒ったクレハを止められるはずもなく、親子対決の幕が開けることとなった。

くクレハく

「良い？ カギリ。ルールは簡単、動けなくして首などに武器を当てる、または、相手の意識を奪った方が勝ちよ」

これは一般的なPVPと同じ仕様で、よく遊びなどにも用いられる。

今回はもちろん真剣勝負だが……。

「合図はお父様がするのよね？ 私は準備OKよ、お母様は？」

「私もよ、アイン、早くして」

そう言うと双方とも杖を構えた。

ホントにいいのかなあ……。とかアインは呟いていたようだがしばらく経つと諦めたのか、旗を振り上げた。

「レディ……………」

場に緊張感が張り詰める。

そして……

「ゴォー！！」

母娘の戦いの火蓋が切って落とされた。

「ゴ—!!」

その掛け声とともに私は後ろに下がる。

まずは様子見に適切な攻撃魔法を発動しようとしたのだが、

クレハの口から紡がれる呪文を聞いた瞬間私は固まった。

「我は乞う、裁きの鉄槌を、断罪の矛を、聖なる剣を……………」

冗談じゃないわよ!!!!!!!!!!!!!!

聖属性最上位魔法ぶつ放す気!? 正気!? 私じゃなかったら即死よ!?

「ちょ!?!?クレハ!?!?相手は僕じゃないんだよ!?!?」

お父様も焦りを隠せないのか止めようとするが正直もう遅い。

そんなことを考えている内にも呪文の詠唱は止まらない、

私は慌てて防御魔法を詠唱しようとして……、

やめた。

あれが発動したら周り一帯も消し飛ばわね。

内心舌打ちする。

普通の防御魔法では危険ね。

そう思い、イメージする。

私……の物全てを守れるほどの防御魔法を。

「……我に宿りし闇よ、我と彼の者に最大の護りを……女神<sup>アイ</sup>の守護<sup>ギエ</sup>の盾……！！！！！！」 「天空の暴風矢！！！！！！！！」

二人の魔法が同時に発動する。

視界を覆いつくすほどのエフェクトとともに飛来する無数の矢が直撃する。

それは見た目通りの威力で、

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！！！

と派手な音をたてて弾けた。

くクレハく

エフェクトが弾けあたり一帯を消し飛ばす程の魔法を放つ。

これでカギリも世界の厳しさに身に染みたでしょ。

そう思い、満足する。

そして思い至る。

私は今何をしたの？

あ……あたり一帯を消し飛ばす程の魔法？

それって……。

アインの方を見て次に今だ煙で見えない向こうを想像し……、

今更自分のやったことに気付いた。



するとそこには……。

修羅がいた。

ふふふ…どうしてくれようかしら。

明らかにさっきのは対人戦なんかで使うような魔法じゃなかった。

これはお仕置きしないとよね。

まずは永遠に痛みが走るようにしようか、それとも目の前でずっと魔法の寸止めとか。

まあまずは勝負を終わらせないとね。

そう、私はまだ気絶していない。勝負はまだ終わっていないからなんだ。そして二人の首筋に静かに短剣を当てる。

「これで私の勝ちね」

そうやってカギリは笑う。

そして唾然とする二人。

「さあ……説教、始めましょうか」

こうして母と娘の戦いは幕を閉じた。

ちなみにお母様は拗ねて、数日間部屋から出てこなかった。

第三話・母VS娘 (修正版) (後書き)

色々変更しました。

## 第四話：冒険準備

あれから数日後、許可をもらった私は、

早速冒険者ギルドに行つてクエストを受けた。

冒険者になるのにもクエストをクリアしないといけないのだ。

ちなみに今回はゴブリンLv5、10体の討伐である。

レベル差1495…虐殺の光景が目に見える……。

始めたばかりの頃はしんどかったけどね。

「さて、準備、準備！」

正直このクエストで準備もくそもないのだが、

一度市場を見てみたかったのだ。

さて、行ってみますか。

っとその前に……倉庫見に行こう。

装備も残ってるし、

もしかしたらお金とか色々残ってるかもしれないと先日思ったのだ。

さっそく倉庫確認……。

オープン!!

「……………」

クローズ……。

あつたにはあつたけど……。

うん、我ながら廃人レベル。

お金：約9800億（うん、もう国作れるね）

武器：神強化品（具体的には、攻撃力：150の武器）Lv9で装備可能）が攻撃力：5000（Lv300武器相当）になってる物（

防具：もう語る必要は無いと思う……。

消費アイテム：0（今までどうやって生きてきたんだろう……）。

どうしよう、これ。

まあとりあえずお金だけは取り出して置いて、後は……。

「適当に武器と防具持っていこう。使えるかもしれないし」

さてと、じゃあ一応市場回ってみようかな……。

あんまり意味なさそうだけど。

うーん、賑わってるね、やっぱり。

今現在私は市場のある表通りに来ている。

ちなみにここは自由市場で、VRMMOの時はプレイヤー達が自由にアイテムを売買することができた場所である。

そこは変わらないらしく、冒険者達による店が8割を占めていた。

武器屋はもちろん防具屋やアクセサリ店など多くの店舗があり、露店みたいなものである。

VRMMO時代に見た時よりも現実的なため、少し新鮮だ。

しかし……………。

買うものがない……………。

基本的にこういう市場ってレベル高い人がいらなくなったものを売り、

レベル低い人が必要なものをそこから買い取る形だ。

つまり、カギリは明らかに前者で、買うものなど消費アイテムくらいしかないのである。

「ダメじゃん……………」

まあいつか、とりあえず買うもの買おう。

まずはMP回復かな。しかも上位の。

「売つてるとこ少ないな、あ、あった。すみません、Sグレードのポーションって何個ありますか?」

「おお!??えっと、……………80個くらいだな。……………ん? お遣いか?

えらいな嬢ちゃん」

びぎッ

いや、そうね。分かってたわ。

私は5歳、私は5歳。

「うん！そんなの！でね、そのぽーしょんぜんぶほしいの！」

……………。

恥かしいわね、これ。

そんなこんなで店を回ること30分、目的の量を達成した私は街の門に向かってる。

店を回るごとに子ども扱いはさすがに傷ついてしまったが。

「ん？ あれって討伐隊？」

やっぱりそうだ。

討伐隊、ボスを倒すために組まれた部隊のことだ。

ここら辺のボスと言えば……

Lv15のゴブリン隊長、Lv50のマリオネット、Lv500のレッドドラゴン。

そしてプレイヤーから「初心者虐殺だろう……」と言われていたラウンドに街道に出現するLv1250の狂化したゴーレム。

その4体くらいだ。

まあ最後はないと思うけど、何を狩りに行くのだろう。

気になる……、ものすごい気になる。

と、いっしょとで

「ねえねえ、お兄さんこれは何をしているの?」

必殺上目遣いである。(さつき市場で覚えた)

まずは聞きやすそうな若手の冒険者に聞いてみる。

「ん? おっと、えらく小さいお客さんだね。この集まりに興味あるのかい?」

……。  
も、もう慣れましたよ？

「うん、武装いっぱいつけてみんな怖い顔してるからどうしたのかわなって」

「そっか、僕たちはね、皆が平和に暮らせるように狂化ゴーレムっていう悪いモンスターを討伐しに行くんだ」

ん？ …… kyokagoo-remu？ ああ、狂化ゴーレムね。そっかそっか狂化ゴーレムか。

……。

え？……。

キキマチガイデスカ？イマコノヒトキョウカゴーレムツテイイマセ  
ンデシタ？

「あ、あの……えと、じゃあお兄さん達レベル高いんですね、凄いです。ちなみに最高レベルの人っていくつなんですか？」

言った後で口調が戻ってるのに気付いたが、もう気にしてられなかった。

狂化ゴーレム……それは本当に狂っていた。

普通のボスやモンスターならレベル相応が集まれば狩れるだろう。

でもあいつだけは違っていた。

今の私でもソロ狩りは正直きついものがある。

聞いた話では1200Lvパーティー6人が秒殺というのもあったらしい。

最後には二日かけて四つのパーティーが順番狩りがデフォという形に落ち着いたくらいだ。

「ああ、そうだよ。僕は最近Lv900になったんだ、それに1人はLv1120のバッファードだからねLv200分くらい底上げされるんだ。狂化ゴーレムなんて一瞬さ。

言葉が出ないんですけど……。

結論、絶対に負けて逃げ帰ってくる。そのPTなら狂化すら引き出せない状態で負けるだろう。

はあ……なんかもういや、頑張って負けてきて。

うん、私は平和にゴブリン狩っておくから。

さて、行こう。

「そうなんだ、じゃあ頑張ってねお兄さん！」

そういつて私は立ち去ることにした。

ん？私が参加したらいいんじゃないかって？

1、絶対に入れてもらえないし、Lv1500ってことを信じてもらえない。

2、回復アイテムが少ない。

3、面倒。

以上の理由から絶対に行きませんともな。

ゴブリン ゴブリン 〽

そう思いながら私は嬉々として街道へと向かった。

そう、ゴブリン出現時以外しかゴブリンが出現しない街道に。

#### 第四話：冒険準備（後書き）

今回短いすねw

待たせた割には短くて申し訳ないです。

次話は

たぶん長いです。今書いてますけど…。次話は結構速く投稿できそうです。

多くのアクセスありがとうございます>><

第五話：本気のバトルメイジとユキ（修正版）

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

振り下ろされる巨大な腕を紙一重で避ける。

今まで私がいたところの地面がなくなっていた。

後ろにはボロボロの討伐隊。

前には狂化したゴーレム。

何でこんなことに……。

そう、それは時間にして10分ほど前だ。

あの後街道に行った私はすぐミスに気付いた。

ゴーレム……湧いてるじゃん。

そう、ゴーレムが初心者虐殺と言われているのはこのことである。

初………  
初心者が必ず通るゴブリン狩りクエストの場所にランダムで現れる  
のだ。

「やっちゃった、てへっ」

と、いうことである。

その後すぐに討伐隊が来てくれたのだが5秒かからずに戦線離脱。  
面倒なことにロックされた私はソロ狩りを余儀なくされたのだ。

まあ逆に言つと好都合である。

一応見られたくないスキルとかもあるし。

「つと危ない！」

砂塵が巻き上がり、再び地面が無くなる。

ホント攻撃力が尋常じゃないわね。

さてと、ちよっぴりやる気だしますか。

「チェーン  
鎖」

まずは捕縛魔法を試してみる。

しかしゴーレムは鎖を平然と引きちぎると逆に攻撃を仕掛けてきた。

まあ予想の範囲内よね。

なら……！

「契約に基づき召喚されし魔槍よ、彼の者を貫け！闇の刃」  
ダークネス・エッジ

地面から黒い槍がゴーレムに向かって伸びる。

しかしゴーレムを貫くはずだった槍は、パリン！ という音だけを  
残し砕け散った。

「うそ………」

これが狂化ゴーレム……なの！？ ありえない！

上位魔法の槍があんな簡単に砕け散るなんて！

そんなことを考えてる間にもゴーレムの攻撃はやまない。

地面はは抉られ地形そのものが変わっていく。

避けるのも一苦勞だ。

「もう！ 何なのよこいつ！」

少なくとも並みの冒険者じゃ瞬殺である。

私も5歳の体というハンデもありかなり辛い。

一旦距離を空けようと後ろに跳躍する。

すると……。

「あれ？この辺のはずなんだけど……」

後ろから人の声がしてきた。

「うそ！？ 人がいたの！？」

こっちは跳躍しているのである。

軌道修正なんてできるはずもなく……、

「どいてー！」「え！？」

見事にぶつかって二人とも地面に転がる。

「いったあ……。ってあなた大丈夫？」

「痛たた……。一応大丈夫です。あなたの方は大丈夫ですか？」

「私は大丈夫。そっちも無事でよかった。ってユキ!？」

「え？」

そうその娘はユキだった。

この世界にユキがいてくれた。

そのことで胸がいつぱいになる。

「会いたかった、会いたかったよう」

そう言って私はいつものように彼女に抱き着く。

しかし、

「どうして私の名前を……？ あなたは……？」

「え？ 私だよ！ カギリだよ！？」

「????？」

ユキは私を知らなかった。

どういうこと？ 別人……なの？

思わぬ再会？に混乱していると、

不意に周囲に影がさした。

しまった！

そう思った時にはもう遅い。

振りかぶった腕はもう目の前に迫っていた。

回避なんて間に合わない！

せめて彼女だけでもと突き飛ばす。

そして、ゴーレムの腕が無残にも頭上に振り下ろされた。

くユキ

「え？……」

私は混乱していた。

目の前にはゴーレムと血だらけの少女。

何で名前を知っていたかなんて疑問は吹っ飛んでいた。

また助けられた……この娘に。

また？ どうして私 ” また ” なんて思ったの？

さっき会ったばかりなのに。

何故か無性にこの娘が懐かしく、愛おしくなった。

でも、そんな時間も今この場にはない。

ゴーレムは次に私を標的にする。

恐怖で体が動かない。

私、死ぬの……？

まだ7年しか生きてないのに？

やるべきこともいっぱいあるのに……。

でも無情にもゴーレムは止まってくれない。

私は死を覚悟する。

そして振り上げられたその腕が私に振り下ろされる。

お願い……！誰か……！！

そう強く願った瞬間！

「やらせない……！」

そんな声が聞こえてきて、目の前で……

ゴーレムの腕が消えた

ダメージだけじゃなく血とかも出るんだ……。

そんなことを思いながら目を開けるとゴーレムがユキを襲おうとしていた。

え……？

ユキが殺される？

私の目の前で？

まだ何も彼女にしてあげられてないのに？

そんな……

そんなこと……

絶対にやらせない!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「やらせない……………」

バトルメイジの能力を開放する

もう遊びは止めにしよう。

そして私は始める。

虐殺を。

「喰らえ」

そう言って闇でゴーレムの影の腕を喰らう。

すると、ゴーレムの腕が弾ける。

これは影を使った魔法で、バトルメイジ職のみのユニーク上位魔法

だ。

ちなみにMPの消費ははもの凄く多かったりする。

### 閑話休題

立て続けに、次の魔法を発動する。

「ブラッディ・チェーン  
血の鎖」

自らの血で作ったチェーンで相手を捕縛する禁忌の魔法。  
捕縛してる間に私は二本の杖を装備する。

そしてその杖に魔力を纏わせ剣にする。

「闇よ。我を守護し、我に力を与えよ。術式魔装！」

さらに自らを強化し最大の火力を出せるようにする。

ちょうどその時、鎖が引きちぎられた音がした。

「やっとなんだ。遅かったね、じゃあさよなら。消えて」

準備が済むまで切れなかったなんてホント弱いわね。

ソロが難しい。それは嘘ではない。

しかし、それは要求された部位を持ち帰るために手加減して戦わないといけないからだ。

本気でやればゴーレムは何も残らないだろう。

そして、ゴーレムの目の前に移動する。

まずは一閃！

それでゴーレムの片足は易々斬れた。

そしてバランスを崩したゴーレムに12連続の攻撃を容赦なく叩きつける。

1PTを全滅させた狂化ゴーレムは1人の少女にあっけなく粉碎した。

「え………?」

ユキ

「え……？」

私は混乱していた。

さっき血まみれだった女の子。

その女の子が一人でゴーレムを……

それも一瞬で!?

本で見たことがあるのだがあのゴーレムは1200LVを超えていたはずだ。

なのに……。

ゆっくりと彼女が振り向く。

「あっ……あの……」

得体のしれない恐怖に苛まれ口が動かない。

助けてもらったのに。

すると彼女はそれに気づいたのか少し寂しそうな顔をして、

「大丈夫。これは夢。起きたらあなたはいつもの日常に戻るわ。そうね、杖を1つあげる。頑張ってね、ヒーラー」

「え？ どうして私の目指すしょうくを……」

そこで何故かまぶたが重くなり、

私の意識は途絶えた。

「ユキ……おやすみ……」

私は彼女を眠らせた。

怖かったのだ。

自分を恐れる彼女が……。

彼女を連れてテレポートで町に戻る。

昔使っていた私たちの家。たぶんそれが今の彼女の家だろう。

行ってみるとそのとおりでユキの親が慌てて出てきた。

私は彼女をプレゼントを添えて引き渡す。

これで彼女も少しは楽になるだろう。

私なりのお節介だ。

少し寂しいけど、私は去ることにする。

じゃあまた逢う日まで、さようならユキ。

第五話：本気のバトルメイジとユキ（修正版）（後書き）

さてここまで書いたんですけど……

次は幕間を挟んでの10歳のカギリさんです。

世界巡り編です

まだまだ分は稚拙ですがそれでよければ読み続けてやってください。  
いつか直せたらいいな。色々w

## 幕間：噂の少女は冒険者になる

ユキ

最近この辺で噂になっていることがある。

黒髪の5歳くらいの少女が狂化ゴーレムを一瞬で倒した

というものだった。

大半の者はそれを嘘だと、ありえないと適当に流すのだろう。

しかし私は知っている。

その少女は実在していたことを。

あの日、私は起きたら自室に居た。

本当に夢かと思うくらいだった。

でも自室には見慣れない杖があったし、ボロボロの服もあった。

母に聞いてみると家の前に倒れていたらしい。

絶対彼女の仕業だ。

家を知っているとところもそうだけど、私を知っているみたいなのよね。

だけど、私の記憶に”カギリ”という名は無い。

一回会ったのなら覚えてはいるはずなのだけれど…。

「絶対探し出してみせます」

あんなにあっさり逃げられると腹が立ちます。

しかも最後は寂しそうな顔をしていました。

凄く気になります。

「はぁ……また会えるといいんだけど……」

そう思いながら私は日課になった薬草採取に向かった。

その頃カギリはせつせとゴブリンを狩っていた。

「あゝ面倒……」

あの時、ゴーレム倒したのは良いものの、証拠となる部位は木端微塵になって無くなっていて、倒した申請ができなかった。

さらにゴブリンを狩るのを完全に忘れて帰ってしまったので、冒険者になるクエストのやり直しである。

といった理由で、私はゴブリンを狩りに来ている。

「むう……」

考えている間にも、カギリの能力による持続ダメージで一瞬にして塵になっていく。

なんとも面白くない。

もう軽く60体は屠っているのだ。クエストはすでに完了。

帰るか……。

そう思つて前もつて用意しておいた帰還のクリスタルを使う。

こんなところまでゲームなのよね。

そしてホームに指定しておいた冒険者ギルドに入る。

「狩ってきましたよ。冒険者の証よろしくです」

そう言つてゴブリンの腕輪60個を渡す。

本来20個で良いのだが……。

その瞬間担当の顔が引き攣る。

まあうん、早いよね。

まだ30分だもんね。

受付けはまだ顔が引き攣っていたが、諦めたのか手続きを始めた。

仕事熱心だね。

「あとはここにサインと、保護者の同意書の提出をお願いします」

カギリ・エスフォード……っと。

それと同意書ね。

同意書を渡すと受け付けの人は妙に納得の表情になっていた。

はて……？

まあいいか……。

「はい、こちらが冒険者の証となります。情報の提示はメニューより自由に変更可能となっております。」

また、紛失した場合2000ギル必要になりますので気を付けてください」

「了解です」

さて、これで戦士に転職可能なわけだけど……はて、転職官って誰？

余談だが、

後日職に就くために行った先でいた父親に、カギリの顔は引き攣っていて、

無事戦士にはなれたのだが、心なしか厳しかったという。

**幕間：噂の少女は冒険者になる（後書き）**

幕間じゃなくね？って突っ込みは受け付けておりませんWWW  
ごめんなさい、幕間っぽくないです。

ぶぎゅ〜

第六話：変化々王都襲撃（前書き）

今回相当投稿が遅れましたことお詫びします。

あと学園編などとほざいておりますが、作者は学園編があまりにもこの物語に合わないということに気づき消し去りました！えへんっ！

カギリ「ちゃんと、お詫びしようか」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ...

はい、読者の皆さんごめんなさい；すいませんでした；

そのこともあり色々遅れたのですが^^；

とりあえず学園要素はまたの機会にしようかと思ってます。

前文が長いのもあれですし、では、本編をお楽しみください。

## 第六話：変化〜王都襲撃〜

さて…王都にいるのが飽きてきた感じなカギリ、10歳でございませう。

……………。

何言ってるんだらう……私。

とりあえず王都の周りの敵が弱すぎて面白くないというのが本音なのよね。

というところで王都出てきました！

え？ 展開が早い？ 学院どこいったって？

そんなのポンコツな作者に聞いてよね！

……………コホン。

とりあえず王都暇だったから出てきちゃいました！

ま、まあ当然の判断よね！

ん？ お父様とお母様が許したかって？

それは……ほら、手紙とか置いて（汗）

だって絶対許してくれそうにないんだもん！

黙って出てきたのは悪いと思ってるけど。

そして現在私は、商人の馬車に乗せてもらってまったりしている。

うーん、それにしても暇ねえ……いつも思うけど。

そう、街から街、王都から王都間の距離が凄く長いのだ。

「おじさん暇〜」

「おいおいそれ何回目だ？ もう少しだぞ？ あと2時間くらいで着く」

2時間……。

鬼だ。

ここまで来るのに5日と8時間…まだ私に我慢させようというのか

……。

あ、今誰か、そこまで来たらあと2時間くらい……とか思ったでしょ。

でもね！ 暇なのよ！

ここまで5日と8時間何も起こらず……まあ起こったら起こったで面倒で嫌なただけ。

でも何か面白いことあっても良くない？

例えばほら、大道芸の御一行が通りかかるとか、今のようにならぬとかが困んでくる……とか……か？

え……。

ホントに……？

もう！ そんなとこのフラグ回収しないでよっ！

「お、オーク！？ 嬢ちゃん今すぐ逃げろ！ こいつらオークは強い。嬢ちゃんを守りながらは商人の俺には無理だ。これは荷物は捨てるしかないか……」

それに商人も気付いたのか慌ててそんなことを言ってきた。

うん、Lv88程度なんだけどね！ そのオーク。

はあ……まあ暇潰ししたかったけどさ……でも……あと2時間なら先に街に着きたかったな

カギリさんかなりお怒りである。

と、言うことで……

「ねえ、おじさん。　そのオーク全部倒したら旅費タダとかにしてくれない？」

ものは試した。

断られたらそれまでだけど、向こうにもメリットあるし断らないでしよ。

「え？　ああ、まあ荷物が助かるならそれも構わんが……って嬢ちゃん戦うつもりか！？　止めておけ！　こいつら強いと言っただろう！　嬢ちゃんのような子供が敵う奴じゃない！」

ほらね。

「契約成立。　まあ見ててよ、一瞬で終わらせるから」

そう言うってにやりと笑う。

嬢ちゃん嬢ちゃん言われるのもか・な・リストレス溜まるのよね。

さて、足止めた罰は大きいわよ、オーク達。

杖を構える。

あ、そういえばLv1500で覚えられる魔法って試したことなかったっけ。

……実験台決定ね。

ちやっちやとやりますか。

そう言うって彼女は闇属性最上位魔法をLv88のオーク達に放った。

王都スファイア

く商人：エイクく

「何だったんだ？ あれは……」

商人であるエイクは先の客人について一人考え込んでいた。

少女、……名をカギリというらしいと出会ったのは、エイクが王都トリスティアでの用事が終わり、王都スフィアに戻ろうとしていたところだった。

少女はどこでもいいから違う街に連れて行ってと言ってきた。

背は低く、一見子供にしか見えなかったが、不思議と魅力を感じる少女だった。

最初エイクは当然のように断った。

いくら街道が整備されているとはいえ、いつ何時何が起こるかわからない。

そんな中こんな子供を連れて行くわけにはいかなかったからだ。

しかし少女は引き下がらなかった。

少女は自分が冒険者であると話し、冒険者の証を提示してきたのだ。

これにはエイクも少し驚いた。

しかし、冒険者と言えど子供である。

すると少女は急にこんなことを言い出した。

「大丈夫です。護衛役も兼ねて付いていきますし、旅費は自分で出しますから」

と。

正直呆れた……。

商人と言えど何も鍛えてないわけじゃない。

材料取りに行ったり色々と大変なのだ。

正直少女に守られるほど弱くない……。

しかしそれでも引き下がらない少女に対してエイクは8割諦めで行を認めた。

「でも、あんなことになるとは……」

正直な感想、凄まじかった。

オークに襲われた俺は彼女を逃がすのに必死だった。

それでも戦おうとする彼女を見て俺は無謀だ……と思った。

しかし、その後それは愚かな考えだと知ることになる。

「我は求む、我に刃向う者へ罰を、覇をもつての終末を。  
炎」  
終焉ラグナの

彼女がそう呟いたその瞬間。

あたり一面が黒い炎により埋め尽くされた。

「なっ!?!」

威力の高すぎる魔法。最上位魔法だと一目でわかる。しかし、  
こんな魔法見たことない!

考ええている間にも、一瞬にしてオーク達が塵になっていく。

強い……! 強すぎる……なんなんだこの子は……!?

見た目10歳かそこらだぞ? 最上位魔法なんて使えるレベルにな  
るには相当の年月が必要だ。

なのに……。

言い知れぬ恐怖に包まれる。

そして全身の震えが止まらなくなる。

限界に達しゆっくりと意識が落ちていこうとした時、

魔法が終わり、少女の声とともに現実に戻された。

「さ、行きましようか、スフィアに」

その声は凄く明るいもので先ほどの魔法を発動させた主のものとは思えなかった。

そのことに安心すると同時に自分へあの魔法を放たれたらと思うと恐怖を隠せない。

その後、俺は黙って頷いて、今までより速いスピードで馬を走らせた。

「しっかし、あんな化け物みたいな人物に逢っちゃまうとはねえ」

エイクは商人だ。

数えきれないくらいの冒険者を見てきたし、相手を見る目は良い方だと思っていた。

でも……あんなに強い魔術師は見たことない。

それに最初に気付けなかった。

「俺もまだまだってことかね……」

そう納得すると、俺は何もなかったかのように自由市へと向かう。

「さて、嬢ちゃんの旅費分を稼がないとな」

そういつていつものように店の準備を始めた。

余談だが、その日の売り上げはいつもの倍くらいあり、以後、彼はカギリのことを幸運の女神として崇めたという。

その頃カギリは化物扱いされていることなど微塵も知らず、商業都市スフィアを満喫していた。

「さすが商業都市。活気が違うわねえ」

毎回来るたびに思うことだ。

商業都市スフィア……冒険者の間では有名であそこに行けば何でも揃うと言われるほど世界中の物がここに集まってくる。

鉱石、武器、防具、薬草など冒険に必要な物から調理道具などの生活必需品まで、ホントに何でもある。

「ん？それにしても……ミスリルがこんなに安くなったとは……これは良い発見ね」

ミスリル、それはVRMMO時、とても高価に扱われていたものだ。

ミスリルを使えば120Lv相当から1500Lv武器まで作ることができたのだ。

自分自身のレベルに合わせて幅広く生成することのできたこの鉱石は瞬く間に売れ、結果、値上がりした。

特に高レベルの武器が作れる唯一の鉱石でもあり、その層の者が欲しがるため、低レベルの者では手が出せないくらいになってしまったのだ。

それがこの世界では10ギルしないのである。

もちろん300個ほど購入。

とりあえず鉱石を買ったのは良いけど……工房が無い。

エスフォード家にも炉などは存在せず、武器が作れなかった。

「やっぱりどこかに拠点を持つべきかもしれないわね」

拠点、ホームと呼ばれるものはキャラクターが土地を買いそこを自由に改造できるようにしたものだ。

もちろん店としても使えるし、VRMMO時は店員のNPCを雇うこともできた。

無駄にギルを取られたが……。

まあ何が言いたいかと言うと、凄く便利なのだ。

誰か知り合いが来た時などもメモを残していつでももらえたりと使い道は色々あるのだ。

「でもスフィアは無いわね」

もう良い立地の場所など存在していないだろうからだ。

……とりあえず、全部の町を回る必要があるそうね。

二、三日後にまた商人についていこうかなあ。

そんなことを考えながら適当にぶらつく。

暇ね〜……ってダメダメ！こういうこと考えると大概いらぬフラグの回収にはしるんだから。

「も、モンスターが！モンスターが街に入り込んだ！！非戦闘員は早く逃げるんだ！！！」

外壁の見張り兵らしい男がそんなことを叫びながら走ってきた。

……………。

ほら……。

じとーっとしてみると、男と目があつた。

その瞬間、慌てたようにこっちに走ってきた。

「君！何をしているんだ！早く逃げないと！！！」

むしろあなたが逃げないと……。

そんなことを思ってしまう。

はあ……厄介ごとFLAG立ちまくりね、今日。

「えつと？ 何が入り込んだの？」

とりあえず聞いてみる。

まあゴブリンかオークあたりだろう。

そう思っていたのだが……。

「え？ あ、ああ……狂化ゴーレム2体とレッドドラゴンだ」

「ええええええ！？」

それはホントに非常事態じゃない！

「ヤバいもうすぐそこまで来てる！早く逃げるぞ……！」

そう言って手を握ってくる見張り兵。

イラっ

むかつくから決めた。こいつ今から見張り兵A。

じゃなくて！ いやいやいや何で1200LV超がこんなところにいるのよ！？

しかも街に入ってくるって……。

やっぱり現実化？ 何かの影響！？

今は考えてても仕方ない！

とりあえずそいつら倒さないと。

もう！ 問題はっかり降りかかってこないでよねっ！……！

「見張り兵Aさん、ごめんね。ちょっとゴレム倒しに行ってくる」

そう言っで見張り兵Aの手を振りほどいて走り出す。

「え？ ちょ！？ 見張りA！？ いやいやそれより倒しに行くって……はあ！？」

そりゃそんな風に言いたくもなるだろう。

だが今回は無視。

なりふり構ってられる状況じゃない。

1200Lv相当2体と1400Lv1体。

今回は遊んだりしてる場合じゃないわね、急がないと。

そう思い、私はテレポートを使つての移動を始めた。

**第六話：変化〜王都襲撃〜（後書き）**

今回3パートに分けようと思っってます。

次回は戦闘パートでございます。

デュアルマスターや使い魔 咲 の登場です。  
ではまた〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1379x/>

---

Unlimited Cross World

2011年11月9日23時18分発行